発行日　2006年6月20日（隔月20日発行）通巻253号　1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター　会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial & Error

No.253
July - August 2006

特集：

イサーンの村から始まった“Something”

～地場の市場が生み出したもの～

JVC Japan International Volunteer Center

特集：

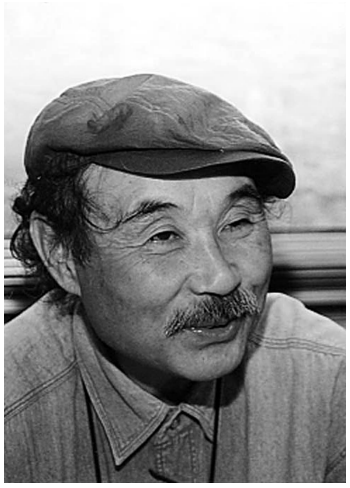
イサーンの村から始まった“Something”

～地場の市場が生み出したもの～

■村の朝市の様子

JVCがタイで進めてきた「地場の市場づくり」プロジェクトが終わった。21世紀の最初の6年、イサーン（タイ東北部）の片隅で生きいきと息づいてきたこの実践には、従来のNGOのプロジェクトの枠に収まりきらない何かがあった。ふわふわとつかまえどころがなく、アメーバのように非定型で、いつも人のざわめきがあり、しかも行きかい集う人々は一人ひとりが表情を持っている。困難な時代に立ち向かう人々の思いの表現とも言えるこのプロジェクトの終わりは、何かの始まりでもあるという予感がある。人々の思いを乗せて、ここから何が生まれ、どう成長するのか。JVCやそれにつながる皆はどうつながっていけるのか。そんなワクワク感を共有したいと、この特集を編んだ。(編集部)

「おすそわけ」を、村の経済に組み込む



大野（おおの） 和興（かずおき）

1940年生まれ。ジャーナリスト（農業・食料問題）。村歩きが仕事。JVC理事。著書に『日本の農業を考える』（岩波書店、2004）など多数。

◆水牛はよかった

九〇年代初め、ぼくがイサーン通いを始めたころ、ここにはたくさんの水牛がいた。イサーンの稲刈りは、かなり長い稲株を残す。刈り取りも済んで仕事がなくなった水牛は、田んぼで終日過ごす。乾季、草も枯れ、水牛はひたすら稲株を食べる。地上部分を食べつくし、根っこを鼻と舌で掘り起こして食べつくしたころ、雨季が来る。忙しい季節。だが水牛はあわてない。日中の暑い盛りは昼寝か水浴びで過ごす。

地場市場のプロジェクトが始まったばかりの二〇〇〇年八月。これから始めようという朝市をめぐって夜、村の寄り合いがあり、同席した。話はああでもない、こうでもないと延々と続いた。村の寄り合いがとりとめがないのは万国共通なのかなあ、などと無責任な感想を抱きながら隣で通訳してくれている、JVCタイ駐在として赴任したばかりの松尾康範君の言葉に耳を傾けていた。

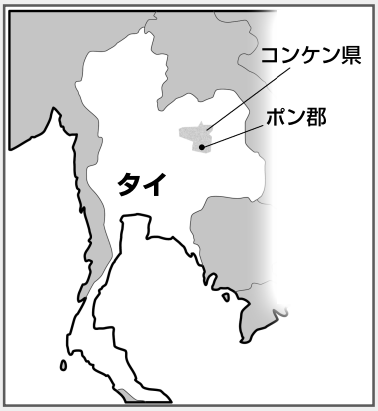
五十年配のおじさんが話していた。「トラクターになって金はかかるし、第一忙しくていけない。その点水牛はいいよな。自分で草を探して生きているし、水牛に合わせてこちらも昼寝できるし」。その頃には、イサーンの村でも水牛を見かけることが珍しくなっていた。

水牛の話から昔はよかったという話になり、これまた五十年配のおばさんが「以前は食べものなんて余れば隣近所におすそわけしたもんだ。朝市で売るとなると、おすそわけはなくなってしまって寂しくなるね」。また、ああでもない、こうでもないという話になったが、松尾君もよく聞き取れないらしく、「ま、いきましょう」と酒をついでくる。結局、話は「おすそわけをよみがえらせるのが朝市だ」ということに落ち着いたようだった。

ぼくはその頃、市場原理に代わる経済の原理は何だろうとしきりと考えていたので、「おすそわけ」と「朝市」の話は強く印象に残った。同時に、イサーン語でなんと言うのかわからないが、すでに日本では「もったいない」以上に死語になっている「おすそわけ」という言葉をすんなりと訳した松尾君の感性にも感心した。

◆主役の交代

松尾君がついでくれた四十度のタイ焼酎をあおりながら、「おすそわけを農家経済（家計）と地域経済の中に仕組みとして組み込む。これは生産から交換にいたる今のあり方を変え、ひいては人が何に価値を認めるかという意識まで変える。革命だぞ」とわめいた



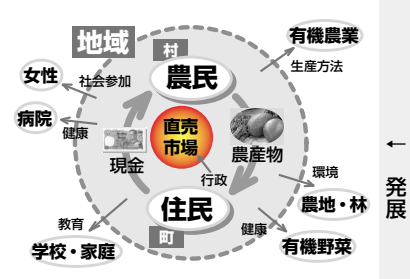
「地場の市場づくり」プロジェクト

タイ国内において、1960年代から政府によって推進された近代農業によって、在来の地域資源と自然環境は消失し、また、国際市場の影響を受けて農作物の価格は不安定となった。その結果、農民たちは多額の借金を抱え、出稼ぎを余儀なくされている。

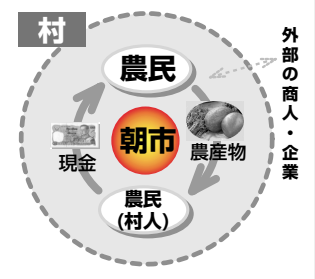
このような状況の中、JVCは地域の中で資源とお金が循環する流通システムを作ることで、外部から受ける大きな経済的影響をできるだけ少なくし、村人自身が食物、流通方法、価格などにおいて決定権を持てるようになることを目指した。具体的には、タイ東北部コンケン県ポン郡において、村人が自分の村で朝市を立ち上げ、自分の作った作物や加工品を村人相手に販売するということを促進した。その後、村人＝生産者と町の人＝消費者を結ぶ町の市場へと発展させた。

年表

1999	プロジェクト調査開始
1999. 11	ヤナーン村・ノンテー村で朝市が開始
2000. 4	**プロジェクト開始**
2000. 9	ソックノクテーン村・ソックノクテーンパッタナー村・ソックカムノーイ村で朝市が開始
2000. 10	ノンウェンソークプラ村、ノンウェンコート村、ノンヤプロン村で朝市が開始
2001. 11	コークスーン村、コークパクン村の既存の朝市がリニューアル
2002. 5	ノンブア村・チャイパッタナー村で朝市が開始
2002. 11	**ポン市で町の直売市場が毎週月曜日に開始**
2002. 12	プロジェクト関係者の日本研修ツアー実施
2003. 9	プロジェクト中間評価会議
2004. 6	町の直売市場が完全に有機農作物のみを販売する市場としてリニューアル
2004. 10	プロジェクト関係者の日本研修ツアー実施
2004. 12	**町の直売市場が毎週月・金の２回開催に**
2005. 4	プロジェクト延長フェーズ開始
2005. 4～7	市場委員会が町の直売市場の会員規約を作成
2005. 12	プロジェクト最終評価会議
2006. 3	**プロジェクト終了**



■町の直売市場を中心として、農産物と現金の循環だけでなく、地域に様々な影響や展開を生み出してきた。



■村の朝市を介して、外部の商人などに頼ることなく、農産物と現金が村の中で循環する。

ものだった。

朝市は驚くほど順調に村々に広がった。同時に、これまで現地のNGOが努力してもなかなか広がらなかった「もうひとつの農業」をやる農家が増えた。生産したものを売れる場所ができたからだ。オルタナティブ農業と言われるこの農業方式は、イサーンに広がっていたコメや特定の商品作物の単作ではなく、いろんな作物や家畜を組み合わせて資源を循環させ、自給と商品生産を結びつけた家族経営の小規模農業である。行商人から食べ物を買う人が減り、お金が村内で回り始めた。

朝五時、まだ暗いうちに畑で取れた野菜や果物、山菜、たけのこ、田んぼで捕まえたカエル、手打ちのうどんなどなどを右手に下げ、左手でむしろを抱えたお母さんたちが村の広場に三々五々やってくる。それから二時間ほどで女たちは男たちが一日で稼ぐ分くらいの売り上げを上げて帰っていく。家庭で、村で、経済の主役の交代が静かに始まった。朝市の運営は朝市委員会による自主運営だが、当初は男だけで構成されていたここにも次第に女たちが進出していった。

◆村の地下水

やがて朝市委員会が連合して地場市場委員会が作られ、近辺で最も大きい町であるポン市で有機農産物の地場市場を開くまでになった（年表参照）。村内での関係性と循環から、むらとまちを結ぶ関係性と循環に広がったのだ。生産現場でも、森づくりと野菜づくりの結合や共同農園づくりなどダイナミックな動きが、地域の人たちの手で作り出された。

そのポン市では、増え続けるまち場の生ゴミと地域の農地を結びつけ、しっかりした野菜を作って住民の健康と地域農業の振興、環境問題の解決をねらう地産地消の地域内循環を作ろうという発想が持ち上がっている。今年秋には、市長を先頭に行政関係者や住民一行が、住民主導で地域内循環の仕組みを作り上げた日本の山形県長井市を訪れる。

地域の教育事務所が中心になって学校農園に野菜づくりを取り入れる動きも広まっている。できた野菜は給食にまわされたり、販売して貧困家庭の学費の足しになったりしている。地元の当事者でさえ思いもかけない展開が生まれているのだ。

○

村を四○年間歩いてきた。その中で知ったことがある。それは、村には地下水が流れているということだ。いま起きていることも、根っこをたどっていくと、場合によっては数十年前の試みや人物、あるいは人物群の存在に行き着く。表面的には消えたかに見える実践も、時代と人を得ることでよみがえり、新しい何かを生むのだなあと感じる場合がしばしばある。イサーンでも、せっかくできた朝市のいくつかは取りやめになったり休止している。それはそれでいいのだと思う。また必要になれば、誰かが掘り起こして、時代に合わせて創造していくはずだ。村で働くということは、そういうことだと思うよ、松尾君。

自信を持って地域と農を支える

～市場委員会を担う人々～

森本 薫子（もりもと かおる）

会社員生活ののちにJVCの「タイの農村で学ぶインターンシップ」に参加し、その学びのなかで農的生活の魅力を知る。その後、JVCタイ駐在スタッフに。06年春にJVCを離れ、タイでの生活に入る。

◆生き方に自信を深める

「村の市場を立ち上げる案が挙がったとき、自分は大型スーパーから仕入れた商品を村の中で売ることなのかと考えた。しかしそれはまったく違った。地場の市場とは、我々自身が生産したその土地の食べ物を、自分の地域の中で売ることによって意味をなす」

市場委員会の委員長、ウトンさんは言う。地場の市場の取り組みは、単なる生活改善の手段としてだけでなく、彼らの生き方を自信に満ちたものにするきっかけにもなったのだ。

JVCが協力することができたのは、「機会の提供」だ。研修やスタディツアーを企画することにより、彼らが知識、情報、新しいアイデアを得る機会を提供し続けた。そこで得たものを、自分たちの生活に最も効果的な形で活動として実現できたのは、自然と共存する知恵と能力を備えた彼らの力以外にない。

「JVCが企画した研修やスタディツアーから、市場の意味や新しい知識・経験を得ることができ、それは私たちの中に蓄積となって残っている」

プロジェクト評価会議で挙げられた市場委員の言葉である。

◆農の暮らしをとらえかえす

市場委員会の副委員長であるヤナーン村のチュアムさんは、まっすぐに前を見つめて語る。

「どんな職業においても、利益をあげることが目的である経済活動は奪うことばかりだ。自然・環境を壊す、人間関係を壊す。しかし農は違う。土を守る、木を植える、川を汚染しない。自然の中の生き物が住みやすい環境を保つ。人々の助け合いの関係を築く。農は与えることばかりだ」

■市場委員会のチュアムさん。着ているのは市場の会員の目印である緑色のシャツ。

地場の市場の試みは、農業をやる以外に選択がないからその中で少しでも状況を改善するために行なっているという消極的なものではない。チュアムさんの言葉からわかるように、彼らはこれこそが人間の生きるべき姿だと信じて疑わないのである。市場に関わる会員すべてが同じ意識を持っているとは言えないが、少なくとも市場を支える中心となっているメンバーの意識は共通している。たとえ農業以外の選択があったとしても、彼らは「農」を選ぶだろう。

◆自信が活動を支える

「東北タイの農民」といえば、まるで貧困の代名詞のように使われるが、こんなにも前向きに、自分の生き方、生活に自信を持っている人が、日本にでさえどれだけいるだろうか。ノンブア村の元気なおばちゃんたちは、農園に訪問客が来る度に自分の作った有機野菜を自信に満ちた笑顔で披露する。

「これがあたしたちの作った野菜なのよ！　無農薬だし、化学肥料も使ってないのよ！　本当に身体にいいんだから！」

彼らを見れば、「農」によって生活することに確信を持った村人たちで創り上げられたこの市場が今後もなくなることなく発展していくことに、なんの疑いを持つことはない。

今では各地、各国からこの市場を見学に来る人が絶えない。自分の地域でも試してみたいという農民や地域活動家たちだ。それが、市場委員や生産者会員に更なる自信と誇りを与え続ける。小さくても、地に足がついた取り組みが増えていくことが、大きな権力や不公平な構造に対抗する確実な一歩なのだと、私たちは信じている。

■市場委員会のメンバーをはじめとする村の人びととJVCとは、活動の全期間を通して良好な関係が保たれ続けた。JVCタイスタッフの、活動自体を通しての村での生活が充実していたこともその理由のひとつと言えるのではないだろうか。写真左はそれが想像できるJVCタイスタッフたちの姿。右から、倉川（当時代表）、カンチャイ、森本、松岡。ヤナーン村にて。

日本とタイ、人々の希望がつながった

松尾（まつお） 康範（やすのり）

学生時代からJVCの活動に関わる。97年にJVCスタッフ。2000年からタイに駐在。02年JVCタイ現地代表に。帰国後、アジア農民交流センター(AFEC)事務局長。著書に『イサーンの百姓たち』(めこん、2004)など。

◆グローバル化の中で

九七年のアジア経済危機はまだ記憶に新しい。せっせと外資を受け入れ、一見、工業的に豊かに見えていたタイだったが、バーツ下落とともにその景気は悪化、アジア通貨危機へと連動した。このプロジェクトの調査を始めたのはその二年後の九九年。日本の地域グループの力を借りて、調査のまとめとなるタイと日本の農民交流会を開催したとき、シアトルではWTO（世界貿易機関）閣僚会議が開かれていた。グローバル化経済を推し進めるWTOに待ったをかけるために世界各国から十万人近くの市民が集結して反WTOを唱え、閣僚会議は決裂して終わった。

そうしたなかで「地場の市場づくり」プロジェクトは始まった。外に依存しない地域の経済をつくりあげようとするこのプロジェクトは、世界の市場化に翻弄され続けてきた東北タイの農民たちの気持ちと一致してすすめられた。

日本にも、日常に使うモノが、どこの誰によって作られたかが見えないようなグローバル化された社会を憂い、このおかしな世の中を少しでも面白くしていきたいと考える地域グループが多くあった。国境を越えて人と人との気持ちが結びつく要因が両側にあり、「地場の市場づくり」を通じて日本とタイに生きる人同士がその気持ちを分かち合うことができた。

◆越境する地場

活動に参加した日本の地域グループの一つ（特非）WE21ジャパンの瀬戸山祥子さんは言う。「同じ社会に生きる仲間としてタイの仲間たちと結ばれた。そしてその思いを次世代につなぐという責任感を活動地の村人たちも感じていることに共感した」

（特非）地球市民交流基金アーシアンもその仲間となった。「タイ東北部をこの六年間で四回訪問し、村人たちが力をつけ、ポン市での町の市場の自主運営に至るまでの経過を見ることができた。このプロジェクトにおけるJVCの関わり方について、たいへん共感が持てた」（代表藤田宏子さん）

JVCの役割は、タイと日本の地域に生きる人たちが持つニーズを結びつけ、活動地域に住む人たちと日本に住む私たちがグローバル化された今の社会の実情を認識して、対等な立場で問題点を共有する場を作ることにあった。

アジア農民交流センター（AFEC）の共同代表で、山形県長井市の「レインボープラン」の提唱者の一人である菅野芳秀さんは語る。「まず私の著書『生ゴミはよみがえる』（講談社）がJVCによってタイ語に翻訳されたことに感謝したい。農を基礎とした町づくりがタイの仲間たちに共有されたことは非常に光栄である。地域で活動しているときに、タイの仲間たちのことが常に頭に浮かぶ。同じ未来に向かって連携しながらすすんでいく同志としての連帯感も生まれた。地域づくりと地域づくりが同じ方向で連携するという新しい形の国際交流である」

外に豊かさを求めるのではなく、外に援助するのでもなく、自分たちの住む社会を豊かにするために、越境して仲間たちは結ばれたのだ。

つながった仲間たち

（特非）WE21ジャパン

神奈川県内に36の地域NPOと55店舗のリサイクルショップを持ち、その売り上げをアジアの支援に結びつけている。環境・人権・平和・共生について学び行動することを目的として、講座やスタディツアー、政策提言活動を行なっている。

（特非）地球市民交流基金アーシアン

91年の湾岸戦争による被災民への支援カンパ活動がきっかけで、生活クラブ生協千葉などが母体となり93年に設立。パキスタンやタイを支援し、国境を越え、地域から地域、市民から市民を結びつける活動に力を入れている。

レインボープラン

山形県長井市で97年に始まった生ごみ堆肥化事業。市街地の各家庭や学校などから出る生ごみ・残飯などが集められて堆肥化され、市内の農地で野菜やコメに姿を変えて再び市民の食卓に戻ってくる。土と人、人と人、村と町を結びつける循環の地域づくりを行なっている。「地場の市場づくり」プロジェクトのモデルとなった。

アジア農民交流センター(AFEC)

90年、日本の農民グループがタイの農村を訪れ、村々で農民運動のリーダーと交流したことから始まり、91年に設立。個々の農民や地域が持つ知恵の分かち合いを目的にタイ、韓国、フィリピンなどの農民たちとネットワークを広げている。

いつまでも『ピーノーン』でありつづけたい

松岡 京子（まつおか きょうこ）

大学助手時代にJVCのタイ・スタディツアーに参加。もっとタイに関わりたいと退職し、「タイの農村で学ぶインターンシップ」に参加。帰国後、JVC東京及びタイに勤務。06年春に退職、現在は主婦業の傍ら受験勉強中。

◆「あんたら、仲間だよ」

ＪＶＣと村の人たちが一緒になって取り組んだこの「地場の市場」づくりプロジェクトは、六年間の活動期間の中で、多くの成果を残すことができた。早朝から笑いの絶えない活気のある市場、自信を持って有機農業に取り組む村の人たちの姿、市場を通して作られた村に住む人と町の住民との協力関係。楽しそうにおしゃべりをしながら自分の育てた野菜を販売している村のお母さんたちは言う。「これからも有機農業も、市場の活動も続けるよ。だって同じ活動に取り組む『ピーノーン』ができて、楽しいからね」

この『ピーノーン』という言葉、直訳すると「兄弟姉妹」となる。しかし、血縁の有無に関わらず、「友達」よりも親しい間柄に使われることが多い。「仲間・同志」という意味合いが強いだろうか。

活動地の村の人は、ＪＶＣのことを活動に一緒に取り組む「仲間」として考え、接してくれた。昨年十二月に行なったプロジェクト評価会議では、村人から「外国人だとかタイ人だとか、そういうことは活動する上で何の問題でもなかった。ＪＶＣのスタッフとは、『ピーノーン』の間柄だった」という意見が多く聞かれた。

この六年の間、私たちは村の人たちと一緒に話し合い、悩んだり、笑ったりしながら、彼らが何を大切だと想い、何を「問題」だと感じ、そしてどのような生活を望んでいるのかを一生懸命知ろうとしてきた。同時に、自分は何を大切に想い、どのように生活していきたいかを、一緒にご飯を食べたりお酒を飲んだり（時には歌ったり踊ったり）する中で共有してきた。そこには「支援するＪＶＣ」、「支援される村の人」という構図はなく、ただ「皆が安心して、楽しく暮らせる社会を創る」という共通の目的に向かって一緒に協力しあう「仲間」が集い、語らいあっているだけであったと言える。

◆「お互いさま」の関係

私にとって、そしてＪＶＣにとって、一番の財産と言えるのは、このように、タイに私たちのことを仲間として考えてくれ、『ピーノーン』だと言ってくれる人たちができたことに他ならない。私たちはタイ人でもなければ農民でもない。しかし、それでも私たちのことを『ピーノーン』だと言ってくれるのは、そこに「立場は違えど、同じ目標に向かって今を生きているんだ」という気持ちがあるからだろう。二月にコンケンの家を引き払い、事務所を閉めていよいよ日本に帰国するとなったとき、不思議と悲しくも寂しくもなかったのは、どこにいたって私たちは『ピーノーン』なのであり、その気持ちは変わることがないという確信があったからなのかもしれない。

困っている人がいれば「どうしたの？」と声を掛け、自分にできることがあれば協力する。その代わり、自分が大変なときはほかの誰かが手を差し伸べてくれて、どうしたらいいか一緒に考えてくれる。私にとってタイとの関係は、そんないたって「当たり前」のものとなった。日本人なのか、タイ人なのか、そんなことは関係ない。「支援する、助ける」のはお互いさまなのだ。

◇

この四月末、私はＪＶＣを離れ、東洋医学の勉強を始めることにした。同じタイ駐在スタッフだった森本薫子さんは、これからタイで農民になる。前任者の倉川秀明さんはその前にＪＶＣを離れ、いま住み込みの農業研修に入っている。このプロジェクトの生みの親である松尾康範さんはさらに一足早くＪＶＣを離れ、居酒屋修行の真っ最中だ。

どうして東洋医学？　農民？　居酒屋？　まったく突拍子もないと思われてしまうかもしれない。しかし実は違う。タイの村人たちから「生きていくうえで何が大切なのか」を教えてもらったから、私たちは農や生命、食にかかわる生業（なりわい）を目指して動き出すことになったのだ。もしかするとタイと関わらなかったら思いもよらなかった道かもしれない。

次回、タイに行くのはいつになるかわからない。しかし元ＪＶＣタイのスタッフはみな今後もタイの人たちと『ピーノーン』であり続けたいと願い、次に彼らにあったときに胸を張って「日本の『ピーノーン』だよ！」と言える生き方をするつもりだ。同じように、ＪＶＣとも『ピーノーン』でありたいと思う。またＪＶＣには今後も「ＪＶＣは『ピーノーン』だ」と彼らが言ってくれるよう、この出会いとつながりを大切にしてもらいたい。

第七回ＪＶＣ会員総会 報告

会報誌レイアウト／総務担当　細野 純也

六月十日、第七回ＪＶＣ会員総会が東京・文京で開催されました。七十二名の正会員が出席され、委任状と合わせて定足数を満たしました。

■議案①・
○五年度活動報告・決算報告

まず事務局長の清水俊弘から、二十五周年を迎えるにあたって、今後の活動方針をＪＶＣ内で改めて確認したことを報告し、続いて事務局の鈴木まり、田村祐子、広瀬哲子が、地域開発活動、人道支援活動、国内活動についてそれぞれ報告を行ないました。その後、経理担当の香取佐和子から決算報告がありました。

報告後、会場から「コリア事業の今後の方向性は」「収入の内の公的補助金の割合が増えているが」などの質問がありました。コリア事業に関しては、最近は食糧支援から、絵画展を通して北朝鮮の別の側面を伝えることに主眼を置いていることを説明しました。公的補助金の割合に関しては、従来より公的補助金は二割程度に抑えるとしたポリシーを持っているが、実際は近年この部分（外務省やＪＩＣＡ経由の資金が主）の割合・金額が増える傾向にあること、これに関して危機感を持っており、自己財源を増やす努力を続けることを表明しました。

■報告する田村(左)

■会場の様子(下)

■議案②・
○六年度活動計画・予算案

事務局の渡辺直子、下田寛典、寺西澄子から、地域開発活動、人道支援活動、国内活動のそれぞれの計画について説明しました。その後、予算案の説明を香取から行ないました。

その後、会場から「南アやタイでの活動評価から得られる教訓をどのようにまとめるのか」「ほっとけないキャンペーンに今後どう関わるのか」などの質問がありました。評価に関しては住民との結果共有を予定している旨を説明し、それに留まらず、日本国内への提示も必要だろうという意見につながりました。ほっとけないキャンペーンに関しては、現在キャンペーン自体の事務局体制が作られる過程なので、その事務局と今後関わっていく中で模索していきたいと回答しました。

■議案③・役員改選

林達雄理事、楢崎知行理事、横川芳江理事、足立房夫監事、高塚直子監事の退任にあたり、会員の髙島哲夫さん、深津高子さん、ＪＶＣＯＢの柴田久史さん、スタッフの谷山博史が理事に、大和修さん、樋口達さんが監事として新たに承認されました。同時に、代表理事の選任に関して理事間で互選を行ない、熊岡路矢が今期での退任を表明、次期代表として谷山が就任することを確認しました。ただし、新代表の就任時期が十一月になるため、それまで熊岡が代表業務を継続することになります。

同日開催 ＪＶＣ会員の集い

総会終了後、「日本に住む私たちにできること」と題して、ＪＶＣや会員みずからが日本でなにができるのかを話し合う場を持ちました。当日の詳しい様子は、後日ホームページにて報告いたします。

■まさに意見百出、様々なアイデアが出されました。

新しい役員の方々に一言ずついただきました。

（順不同）

理事

谷山 博史（たにやま ひろし）
（ＪＶＣアフガニスタン代表）

アフガニスタンに赴任して四年、通算して現場で十二年、東京で八年になります。ＮＧＯにとっても市民活動にとっても難しいこの今、ＪＶＣでの経験のすべてを注入して新しい時代を切り開いていきたいと思っています。

理事

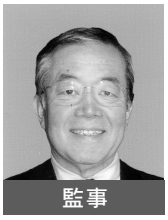
深津 高子（ふかつ たかこ）
（国際モンテッソーリ協会理事、幼い難民を考える会理事）

ずっと幼い子どもの小さな動きに宿る大きな生命の神秘を見つめてきましたが、この度ＪＶＣに再度関わることによって視野をマクロに拡げ、より生命が安心して調和と共に平和に生きられる地球環境のあり方を皆様と共に探りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

理事

髙島 哲夫（たかしま てつお）
（新潟県広報監）

一九八〇年以来のＪＶＣ古参会員です。最近はＮＧＯをコンテンツとして値踏みする企業や、市民の善意を食い物にするインチキＮＧＯも花盛りです。及ばずながらＪＶＣのＤＮＡを守り、育てるお手伝いができればと思います。


監事

大和 修（おおわ おさむ）**（ジャーナリスト）**

タイ・カンボジア国境を皮切りに各地でＪＶＣのスタッフと出会って四半世紀、長年の戦友という思いです。ＪＶＣの強みである現場活動のいっそうの充実と各地で汗を流す皆さんの苦労を生かした説得力ある発言と提言に期待します。課題は現実的でユニークな発想。組織の足腰を強くする創意工夫も欠かせませんね。どうぞよろしく。

監事

樋口 達（ひぐち わたる）
（弁護士・公認会計士）

このたび、監事に就任させていただくことになりました、樋口達と申します。ＪＶＣが、今後益々発展していけるよう、いろいろとお手伝いをさせて頂ければと思っています。よろしくお願いいたします。

※柴田久史さんにつきましては、ご本人の体調の都合により、割愛させていただきました。ご了承ください。

ベトナム

工業化と生産性向上政策の陰で　伊能 まゆ

社会主義国ベトナムはドイモイ（開放政策）以降、貧富の差が激しくなった。政府は工業化政策を推進し、ＷＴＯ（世界貿易機関）への加盟を進めている。そのなかで水や大気の汚染といった公害の拡大、経済的格差の拡大や出稼ぎ問題、エイズ、麻薬などの社会問題が発生、自然資源の減少も続いている。

政府の農業政策は生産性向上一辺倒だ。しかし現実を見ると、さまざまな問題が村でも起こり、深刻な状況が生まれている。その中でＪＶＣは今ある資源や知恵を大切にし、持続的に生産や暮らしが成り立つ活動を進めている。合鴨農法ならぬあひる農法、植林、牛銀行、水の管理、生活改善とさまざまな側面に広がっている。環境教育では自然資源の大切さを子どもたち自身が考えていくことや、集落の青年たちと一緒に地域の環境を考えている。

ラオス

森が減り開発が進むなかで　新井 綾香

ラオスの人々は森に依存した暮らしを送っている。食事の六～七割は森から採れたものだ。一方でラオスの自然はここ十年で大きく変わった。道路の整備が進み、村に向かう途中で大きな木を乗せたトラックと何台もすれ違う。ＪＶＣの活動地のひとつラオ村でも道路沿いに中国とラオス政府合弁のセメント工場ができた。元は村人が使っていた森だった。

人々の暮らしの安定のためには森林を守ることが欠かせない。ＪＶＣは森林保全と農業の活動をしている。水の確保、食べ物自給、現金収入の取り組みなど。水の確保では浅井戸建設の支援を行ない、食べ物確保では米銀行を支援。もう一つは幼苗一本植え。試験栽培では、一本の苗が五〇本に分けつし、従来の一・五倍の増収になった。果樹は村にある品種よりもおいしい品種を支援し、売れやすくしている。

JVC水曜講座

『その地で暮らしていくために』～アジア・アフリカ農村の現場から～

カンボジア、ベトナム、ラオス、南アフリカの農村で、地域に腰を据えて活動しているスタッフが東京で出会ったのを機会に、顔をそろえての報告会を5月17日に行なった。それぞれの地でいま何が起こり、それはどういう意味を持っているのか。そこでのNGOの役割は何なのか。JVC恒例の水曜講座の一環として開かれた報告会は、会場が満員になるほどの盛況だった。（編集部）

■質疑と討論　なにが問われているのか

◆土地問題をめぐって

山﨑・カンボジアは土地の大規模所有に制限があったが、この制限がなくなり、大企業が入りやすくなった。それで森林を伐採し、商品作物の栽培が進んだりしている。また、突然土地を追われる農民も出てきている。

津山・南アだと、アパルトヘイト時代にすでに土地をとられている。その後、土地改革、個人に戻そうという動きはある。しかし、政府が白人の農場を市場価格で買って、黒人に返すというシステムなので、時間がかかる。まだ全体の五％。またそういうことによって売れなかった土地の価格が高騰したりもしている。土地を得ればいいというものではなく、どう使っていくかが課題であり、どのように使うかを支援することが重要。

伊能・道路建設が進み、土地の値段があがっているが、それを買える人がいて、政府が農民の土地を買い取り、高く売ったりしている。地方の役人が転売して儲けたりもしている。南部では小規模農家はほとんどいなくなってきている。

◆グローバリゼーションの進展のなかで

山﨑・みな現金収入が欲しい。その中で重要なのは、農民自身がそれを選択しているのかどうかということだ。出稼ぎにしても自分たちの選択であればいいが、やむにやまれぬということが多い。ＪＶＣは農民の声が政策に反映されるように周りのＮＧＯと協力している。そうした中でＪＶＣとしてカンボジア全体で何をできるか考えていきたい。カンボジアは国家予算の半分が援助、その半分が日本。そういうなかで援助がどのように使われていくか見ていくことも大切だと考えている。

伊能・農民は情報がほしい。ＪＶＣは押し付けはしないということで徹底してやっている。農民たちに各国の状況を理解してもらう。そこで農民自身が工夫できたりもする。そういう機会をＪＶＣが作っていくことで、農民たちが自分たちで選択し、方向性を打ち出していくことができるようにしていきたい。

新井・ラオスは貨幣経済が浸透している印象を受けるが、それが悪いわけではない。ＪＶＣもそれを止めようとはしていない。村人が現金を求めたいと

南アフリカ

農業での自立をめざして

津山 直子

アパルトヘイトのもとで土地も経済も白人が支配していた。黒人は単に差別されるだけでなく、自尊心や主体性が奪われた。九四年に民主化が達成され、「虹の国」を目指し、人種・民族・宗教の多様性を尊重しようとしている。いま南アはＨＩＶ／エイズの問題が大きい。人口の一三％が感染している。成人は四人に一人だ。地域と家族が崩壊し人々が分断されてしまったことがその背後にある。

東ケープ州カラ地区の九村でＪＶＣは農業の活動をしている。農村でも自給できる人は少ない。南ア政府は企業からいろいろなものを買うことで成り立つ農業を進めている。それに対して、ＪＶＣは溜め池づくりや等高線農業、コンポスト・トイレの普及、伝統的な品種の保存と普及、混作や輪作の導入などを通して、自立できる農業を目指している。

カンボジア

農業も暮らしも大きく変化

山﨑 勝

カンボジアは山と水に恵まれた豊かな所だった。ＪＶＣ対象地はプノンペンから一時間。きれいな道路ができている。道路ができると都市との行き来などメリットはあるが、森林伐採など顕著な問題が起きている。中国産りんご、タイ産みかんなども村に入ってきている。自然資源の切り売りが進み、商品作物が入り、食べるための農業はできなくなる。村の相互扶助関係も弱体化している。自分たちで選択し、都市に出て行くのなら良いが、仕方なく都市に出て行く。

ＪＶＣではいま幼苗一本植えを普及している。収穫量は二〇％増えた。種もみも一ヘクタール当たり七十キロが十キロまで減らせた。果樹、魚の養殖なども進めている。農業で生活ができると皆が自信を持つ。次の世代に自然に興味を持ってもらう環境教育にも力を入れている。

思っているかどうかは、村人の選択の問題だと思う。セメント工場は雇用を生むが、自分たちの土地がとられる七世帯の村人は反対している。農民は社会状況に巻き込まれて現金に依存した生活を強いられ、ラオス政府は開発の一環としてそういう政策を進めている。自ら選択できない状況が生まれていることが問題なのだ。

◆選択とはどういうことか

質問・選択と言われたが、その場合農業でなくＩＴ長者になる選択をＪＶＣは支援しないのか。

山﨑・ＩＴ関係の仕事をしている人も増えている。そういう労働市場があってそれが選択できるならいいが、現状は、農村部での農業の近代化によって余った労働力が都市に出ても仕事はない。

津山・子どもが可能性を延ばしていくことは大切。ＩＴ産業づくりは新興国では進んでいる。でもその一方でそうなれなかった子どもが負けたと思う社会をＪＶＣは作りたくない。そういうときに農業が選択肢の一つとしてある社会を作っていきたいと考えている。

■報告と討論を聞いて
ＮＧＯの新しい課題を発掘

大野 和興

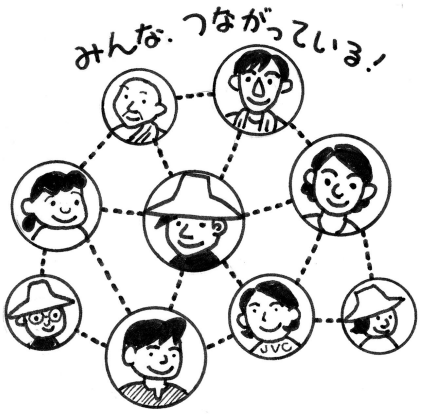
当日のコーディネータを務め、感じたことを述べたい。それは、それぞれ歴史も経済の成り立ちも異なる地域なのに、現実に現れていることは驚くほど似ているということである。生産や暮らしを支えていた基盤や仕組みの崩れ、国や企業による工業化と開発・生産性重視の思想の注入、といったことだ。

その背景にあるのは地球の隅々までを覆う市場経済の浸透と深化である。世界中の国々が、その波に乗り遅れるなと疾走している。人々の暮らしを支えていた地域資源は商品化され、農業のあり方も自給という軸足が崩れて市場依存の不安定なものになった。同時代にすべての人を襲っているこうした状況のもとで、新しい貧しさが地球上に大量発生している。地域には独自の歴史があり、風土がある。その独自性を大事にしながら、地球を覆うこの同時代性にどう足元で立ち向かい、人々のつながりを作っていくか、ＮＧＯの農村開発は新らしい課題を抱えた。

スタッフのひとりごと

さすがタイ人！

タイ津波被災地支援現地調整員　堀 由貴



イラスト／かじの 倫子

「タイ人って…」と思うことがある。

小ぎれいな食堂で、頼んだスープと一緒に自信満々にフォークだけ持ってくる。「気にしないでね」と配慮し、深夜にかなりの大音量でアクション映画を見続ける。

しかし、やはりタイ人は素晴らしく、学ぶところが多い。スマトラ沖津波によりタイ南部で被災した住民の中には、それまで住んでいた土地が資本家に買収されたり、政府に所有権を主張されたりして、未だに生活が不安定な被災者もいる。が、その中でも津波以前から住民組織を作って村を守ってきた住民は、津波の時、「誰々の息子がいない！　あの場所にいるはずだ！」と住民同士の見当がつき、迅速に救援ができたため、被害を最小限に抑えられた。今ではNGOと協力し、土地の所有権や政府の経済発展優先の復興支援に関して根気強く抗議活動を行なっている。

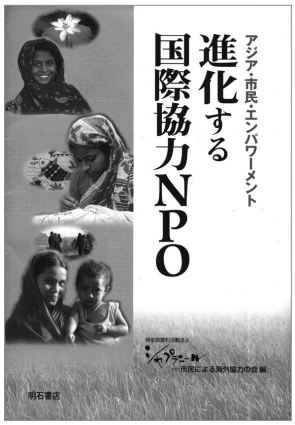
また、今年1月にチェンマイで行なわれたタイ・アメリカ政府のFTA交渉では、農民やNGO、南部の津波被災者までもが一気に集結し、デモや集会を行ない、FTA締結を延期させた。最近では、タクシン首相を退陣にまで追い込んだ、何日間にも渡る数十万人規模の住民集会やデモ活動。住民が何か困ったことがあると、みんなで一丸となり、足を動かし、声をあげる。

タイ人のその当たり前のような行動力と結束力の強さに、いつも感動させられ、学ばされる。どんなに「タイ人って…」と思っても、やっぱり、「さすがタイ人！」なのである。

みるよむきく

『進化する国際協力NPO —アジア・市民・エンパワーメント—』

シャプラニール＝市民による海外協力の会・編　明石書店　2600円＋税



日本の草分け的なNGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」。七二年、バングラデシュ復興農業奉仕団を派遣したことから始まった協力活動は今年で三十四年になる。本書はその変遷をまとめ上げた一冊だ。活動の中でどんな問題にぶつかり、どのように解決したか、その経験・失敗から何を学び、発展させてきたかが、臨場感をもって記されている。

「活動地を決めるにはどうするのか？」「村人とはどんなやり取りが？」「活動は本当に役に立つのか？」…。本書には、こういった海外協力に関する素朴な疑問への答えが、事例を伴って盛り込まれている。

『発足当初の理念は「よりよい援助（ヘルプ）」であった。しかし文房具を子どもに配ったり、農村に日本人が住み込み村人の生活改善を行なうのは「よい援助」にはならない、と現地の人々から教えられた。幾多の議論を通して、私たちは自分が生活している日本を変えていかなければならないことが明確になった』（八章一節より摘記）。「援助から共生へ」とミッションのハンドルを切り、現地において相互扶助グループへの直接支援から現地NGOとのパートナーシップ方式へと移行してきた。

国内でのボランティア活動の紹介にも多くのページが割かれている。「自主学習会」「全国キャラバン」「夏のつどい」「シャプラニール劇団」「作文コンクール」「ユース・フォーラム」「カレーエイド」など、勉強系から楽しもう系まで、すごいボランティアのパワーだ。そのエネルギーを大切にし、伴走するシャプラニールの姿勢には、敬服させる。まさに「市民による」海外協力の会である所以だ。

三百八十ページのボリュームだが、読みやすく整理されている。NGO活動の実際を知りたい方に、一つの事例としてお勧めする。

（カレンダー事務局　荻野 洋子）

タイ

■健康チェックを受ける。

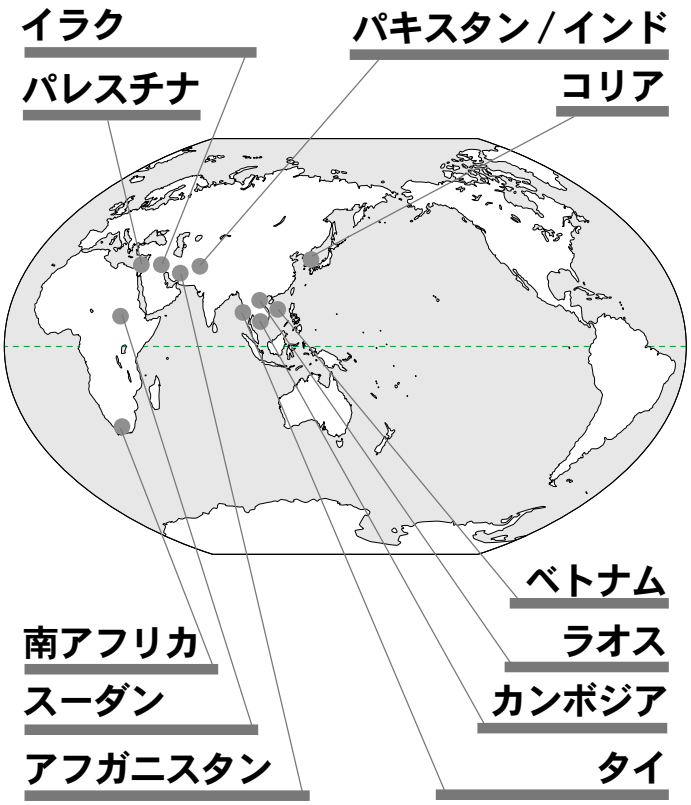
■スマトラ島沖津波被災地支援

被災したタイ南部6県を対象に復興支援活動を実施。特に、被災した在タイビルマ人労働者は、厳しい労働条件や法的措置による困難から生計の復興が遅れている。今後家計の負担を少しでも軽減できるよう、ビルマ人支援団体と協力し、在タイビルマ人労働者の子どものためのラーニングセンターにて、子どもへの健康教育や健康診断を実施、必要な薬を支援した。また、健康管理の情報やビルマ人被災者の現状などを掲載したニュースレターを発行した。（堤）

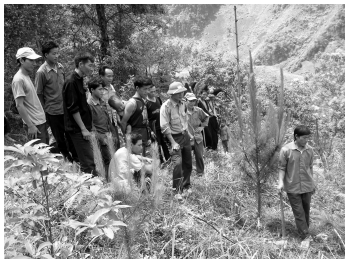
■交流・ネットワーク

「地場の市場づくり」と「タイの農村で学ぶインターンシップ」の2つのプロジェクトは昨年度で終了した。今年度は、これまで関係のあったNGOや農民と連携をとりながら情報収集を行ない、「地場の市場」のその後の動向を追っていく。その第1弾として、元ノンジョク自然農園研修生の日本の「農」の取組みを学ぶ研修の調整を行ない、5月20日に来日した。（下田）

JVCは、現在11の国/地域で活動しています。



ベトナム


■共同林の研修が進む。

■農村開発（ホアビン省）

04年から延長期に入ったホアビン事業は最終年度を迎えた。JVCは村づくり委員会の計画立案、実施、評価・モニタリングの各段階においてサポートしてきた。最終年度は同委員会がより主体的・計画的・効率的に活動を実施できるよう、年次計画会議で年間の活動計画をしっかりと立て、それに基づいて活動の進捗状況を把握していく。そのため月例会合における計画立案と月例報告を強化している。（伊能）

■自然資源管理（ソンラ省）

99年より、住民が自然資源を活かしながら生活改善を目指す取り組みを支援している。共有林の管理方法について、郡の森林保護局と協力して、各集落の共有林を実際に利用して研修を行なった。4集落で合計120名ほどが、下草刈り、枝打ち、防火などについて学んだ。また、果樹栽培について、これまで研修を重ねてきたモデル世帯が中心になって、周辺の住民への技術普及活動を始めている。住民間で技術移転ができるようサポートを続けていく。（栗原）

カンボジア

■環境教育で空芯菜を植える。

■持続的農業と農村開発（SARD）

安全な水や食糧の確保をめざして94年から活動。米銀行、牛銀行、女性グループの運営強化のため、帳簿管理やグループ内規の改善等の研修を実施した。（山﨑）

■資料・情報センター（TRC）

持続的農業、農村開発の資料を95年から提供。農民にも利用してもらえるよう、農村部のコミュニティーセンターに本棚を設置することを検討中。（山﨑）

■技術学校

自動車修理の職業訓練校・工場の運営強化と寮・奨学生支援。シアヌークビル校は労働職業訓練省への移管問題が解決せず、修理コースは終了し交通安全など研修所として再出発。（米倉）

■調査研究・政策提言、ネットワーク

ODA視察に訪れた衆議院議員と情報共有。ENJJ（ODAとNGOの定期協議）人権分科会の今後の方針協議。CEDACのHMB事業モニター。JNNCで国道1号線やバサック住民補償問題の情報共有・協議。NGOフォーラム環境部会参加。（米倉）

アフガニスタン

■充実した医療のためにクリニックを増築。

■女性と子どもの健康改善支援(ナンガルハル県)

◎診療所支援：建物の増築が完了。院長以下新スタッフ体制のもとコミュニティヘルスワーカー（CHW）も活動を開始。

◎女性医療従事者養成コース：生徒の送迎や移動用車両経費の支援を開始し、机や椅子などの業者発注を準備。

◎伝統産婆の職能向上研修：リフレッシャートレーニングの準備を兼ねて伝統産婆の家を訪問し、知識や活動状況を再確認。

◎安全な水の供給と衛生教育：ゴシュタ郡での井戸新設と衛生教育、ゴレーク村での予備調査が完了。衛生教育では診療所スタッフとCHWや伝統産婆の活動との相乗効果を計る。

（本間）

■シギ高等女学校支援

かねて準備を進めていた机付き椅子480脚と黒板15枚を新旧校舎に支援、引き渡し式を行なった。（谷山由子）

■政策提言・ネットワーク

引き続き軍による復興支援の問題点について情報を集め、NGO間で協議を行なっている。（谷山博史）

ラオス

■森の持続的な利用法を話し合う村人とスタッフ（右）。

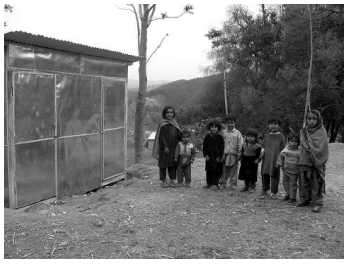
■森林保全

乾季の終わる5月下旬まで、引き続き土地森林委譲（LFA）を行なっている。3月後半から始まったナパン村でのLFAが5月10日にようやく終了した。また、ナコックナイ村で5月中旬に今年最後のLFAをはじめ、6月中に終了する予定である。両村とも近隣の村と境界線の問題を抱えていたが、解決の見通しがたった。本格的に雨季が始まる6月からは、村人の食用と副収入の向上に役立つラタンの植栽を5村13世帯で支援し、さらに村の森を守る「森林ボランティア」の育成に力を入れていく。（賀川）

■複合農業・生活改善

ブンフォアナタイ村で実施してきたSRI（幼苗ー本植え）の試験栽培は順調に進んだ。4月の初旬にスタディーツアーを行ない、7村20名の村人に乾季作でも化学肥料なしで稲が育ちうるという事実を紹介できた。今年の雨季作では10村各2世帯の村人が各自の田でSRIを実施する予定。また、5月には現金収入の向上のため、ラオ村にバナナの苗を支援、今後フォローアップを行なっていく。（賀川）

パキスタン／インド

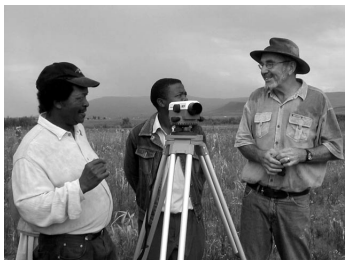

■女子小学校にトイレが完成した。

■大地震被災地支援

地震から7ヵ月が経ち、パキスタン政府は被災地での緊急支援の終了を宣言し、避難民キャンプを閉鎖するとともに、復興再建の開始を打ち出している。JVCでは震災地北部バタグラム郡の村落部、山間部でテント式の家庭用仮設トイレ設置支援を行ない、支援数は5月中旬現在190に達した。ほかに15の小学校に中期使用に耐える構造のトイレを提供した。

最近は被災地住民の生活もやや落ち着きを取り戻しつつあり、長く使える快適なトイレを要望する声が増えている。そこで、今後は家庭用トイレにも中期用デザインを導入していく。震災で住宅が倒壊しトイレを失った人ばかりでなく、これまでトイレを使ったことがなかった人々からもトイレ支援の要望が寄せられるようになってきた。バタグラム郡の緑豊かな山々も、歩いてみるといたるところ野外排泄の人糞で汚染されており、これがこの地方の豊かな降雨に流されて生活用水、果ては飲料水にまで混入していることを考えるとぞっとする。トイレ普及の必要性を実感する。(藤井)

南アフリカ


■等高線測量機の研修を受ける農民。

■環境保全型農業（東ケープ州）

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を行なっている。3月に新規集落を対象に環境保全型農業の研修を実施し、17名の農民が参加した。4月には、等高線測量機の研修を実施。等高線に沿った農業は土壌流出に効果があるため、山間部にあるカラ地区で推奨している。5月現在、2ヵ村に設置したモデル用の穀物畑で主食のトウモロコシの収穫が進められている。（小林）

■HIV/エイズ（リンポポ州）

感染予防、HIV陽性者への支援、在宅介護、エイズ遺児支援を実施。3月に1週間、在宅介護ボランティア1名とHIV陽性者グループメンバー1名と共にジンバブエ赤十字のプロジェクトを訪問。4月にはパーマカルチャー専門家を招いて、今後実施する家庭菜園トレーニングについて話し合った。5月の始めに、シェアの沢田医師によるHIV陽性者対象の日和見感染症に関するワークショップを開催し24名が参加。（青木）

イラク

■イラク支援NGOで共同イベントを開催。

■ガン・白血病医療支援

05年度は3月までの実績で、920万円規模の医薬品を提供したことになる。この実績を踏まえ、06年度もJIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）の一員として医薬品支援を継続することを確認した。JIM-NETは4月上旬にアンマンでイラクの医師を迎えた会議を開き、今後の支援の継続が確認された。

医療支援の実績を含む03年のイラク戦争以来の3年間のJVCの支援総額は4,640万円という規模になる。5月21日にはイラク支援に関わる民間の個人、団体が集い、イラク戦争後の民間支援の展示会「イラクに咲く花」を東京で開催し、200名余りの参加者があり好評だった。（原）

■ネットワークでの催し

イラク戦争後3年、湾岸戦争後15年という節目の時期を迎え、日本のイラクへの関わりを振り返る催しとしてJIM-NETらと共催で3月19日にシンポジウム「私たちはイラクとどう向き合うのか」を開催した。湾岸戦争以来のイラク支援を振り返ると共に、報道や学会の専門家をパネリストに迎えてNGOの視点のみにとどまらない刺激的な議論となった。（原）

パレスチナ

■厳しい経済下で栄養失調児が増加。

■幼稚園児栄養改善支援

ガザ地区の幼稚園児に西岸地区で生産した鉄分強化牛乳と高栄養ビスケットを提供している。JVCは5つの幼稚園、500人の園児を支援。1月以降のガザ地区の経済は急速に悪化。園児の約1割しか朝食が取れない状況だ。本プロジェクトの栄養教育担当の「人間の大地」を通して、急増する栄養失調児への栄養食の提供と栄養指導を5月1日より緊急に開始した。（藤屋）

■トラウマ（心的外傷）を持つ子どもたち治療支援

トラウマを持つ子どもたちの教育・治療専門の学校「ホーリー・チャイルド・プログラム」を通し、言語・音楽療法を支援。音楽療法では毎日の年齢別の集団療法、子どもたちの症状や希望に応じたピアノやギター等の楽器を用いた個別療法を併用している。（藤屋）

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センターを支援。今年も7月初旬にサマーキャンプの実施が決定。センターの活動を通して成長した学生が中心に計画を始めた。（藤屋）

コリア

■子どもたちの絵が美しく照らし出された。

■「東北アジア子ども平和絵画展」

「東北アジア子ども平和絵画展」が、5月16日より韓国ソウルで開催され、日本と朝鮮学校の子どもたちが作品を出展した。会場となるソウル子ども図書館には、韓国在住の中国やモンゴルの子どもたちからの作品も並び、より「東北アジア」の幅を感じさせる展示となった。

期間中、日本から9名の子どもたちがソウルを訪れ、韓国や在韓モンゴル学校の子どもたちと2泊3日のワークショップを楽しんだ。最終日に全員で制作した「東京へのメッセージ」は、6月末からの東京展（渋谷）で展示される予定。

なお、主催者である韓国NGO「南北オリニオッケドンム」は、今年で10周年を迎える。共同代表のチョ・ヒョン教授は、「南北（韓国と北朝鮮）で始めた絵手紙の交換という小さな試みがここまで続くとは思わなかった。子どもたちの平和を生み出す力があれば、いつか平壌（ピョンヤン）でも東北アジアの子どもたちが集まる場が実現できると思う」と話した。（寺西）

スーダン

■報告会でスーダンの現状を報告。

■難民帰還支援（スーダン南部）

活動候補地ジュバの出張から戻った岩間と車両整備専門家の浜口が4月13日、東京にて報告会を行なった。難民・避難民の円滑な帰還を支援するための車両整備支援活動を決めた経緯、現場の状況を報告。会場から「実際の帰還は進んでいるのか」など多くの質問が寄せられた。学生、JVCの会員、他援助機関のスタッフなど40名の方が参加し、スーダンへの関心の高さを実感した。5月16日、新たに採用した車両整備士の井谷を首都ハルツームに派遣した。（石川）

■井戸づくり支援（ダルフール）

現地の治安状況が改善せず、活動開始に向けて状況を見守っている。5月5日、政府と反政府側の最大勢力グループが和平文書に署名したが、それを不服とする勢力による暴動が起こり、内戦の再燃が懸念されている。現地における協力団体「イスラミック・リリーフ」とハルツームにて活動実施場所の再検討を行なう。（石川）

※注① 「人と土は一体である」「人の命と健康は食べ物で与えられ、食べ物は土が育てる。故に、人の命と健康はその土と共にある」という捉え方。（http://www.shindofuji.com/ からの引用）

国内ひろば

JVC network

会員登場！ 35

”ヒトの根っこ“って、何？

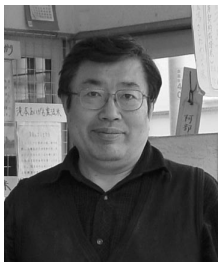
〈東京都〉砂金（いさご） 健一（けんいち）

植物や草食動物は言うに及ばず、肉食動物でさえも土から生まれたものを己の命をつなぐ糧（かて）としています。ですから、ヒトも含む地球上のあらゆる生き物の生命の糧は『土』と「水」と「大気」にあるということは確かです。命あるものはやがて『土』に帰り、サイクルに差はあっても、循環していきます。『身土不二（しんどふじ）』※注①や輪廻の思想ってそういうことから産まれたのかなあ、などと考えている今日この頃です。

自分の身体の中でも日々新しい細胞が生まれているようですから、自分の中で生死が繰り返されているのですよね。新しい細胞が産まれる糧は、通常、”食“から得る。”食“は、人類にとって共通な最も身近な環境問題なのです。

昔のヒトって、こういう基本的な事実をじっくり考える時間があったのではないかな、きっと。土と触れ合い、水や大気の違いを認識し、識別する能力を感性や技や知恵として、暮らしの中で当然のこととして磨いていたのではないでしょうか。この基本的な”ヒトの根っこ“といえる大切な時間、欠いてはいけない時間を失っているのが、「都会人」「先進国人」だと思うのですが…。

東京育ちの僕がかつて社会科教師として十年間、そして米屋になってからの十数年間に、日本の農山漁村に足を運んで出逢ってきたのは、そういう時間を失っていない希少なキラキラした人々です。JVCの皆様とは、途上国の人々から、その輝きが失われないようにという価値観を共有していきたいです。



■経営されているお米屋さん（下記参照）の前で。

こだわりのお米屋さん **金沢米店**、
農が輝く食のアトリエ **穀菜茶房 玄結び**

砂金さんは、有機米にこだわるお米屋さん「金沢米店」（写真左）と、玄米や雑穀を使ったお料理を出す「穀菜茶房 玄結び」を東京の入谷で経営されています。上野や浅草、“谷根千”界隈にお越しの際には、ぜひお寄りください！

http://www.shindofuji.com/
TEL(金沢米店)：03-3872-8844

渡辺（わたなべ） 文衛（ふみえ） ホームページインターン

世界各地で大勢の人々が貧困や食料不足で苦しんでいる現実を見て、何らかの形でNGOに携わりたい、実際の活動にどのような問題があり、どう解決を図っているのかを知りたいと考えて、インターンに応募しました。

ホームページの更新作業が自分に一番ふさわしくお役にたてると思い、二ヵ月間活動したのですが、提供すべき活動情報が予想以上に多かったため、作業に追われて、ミーティングに参加したり、話を聞く時間があまり持てませんでした。今後はスキルアップに努め、作業の効率化を図りJVCをもっと知る機会を増やしたいと思っています。

JVCホームページに…
会員専用ページを設置しました!

６月初旬に、JVCのホームページに、会員の皆さまだけがアクセスできる「会員専用ページ」を設置しました。ページ左側にバナーがあります。現在の内容は以下のとおりです。

① 会報誌『Trial&Error』バックナンバー
② 年次報告書バックナンバー
③ 会員登場！

まだまだ設置したばかりですので、ぜひ『もっとこんな情報が欲しい！』などのご意見をお寄せください。検討いたします。なお、ご利用には、会員番号（本誌をお送りする際の封筒の宛て名ラベルの右上に印刷されている番号）と、下記パスワードが必要となります。

パスワード(2006年７～８月)：CHVVBw0eUW

●７文字目は“オー”です。また、６月一杯は、試験公開期間となります。第７回会員総会議案書に同封しました以下のパスワードをご利用ください。：**7xG4YHa5v6**

新インターン紹介

青木（あおき） 寛子（ひろこ） 広報インターン

昔からケンカや言い争いが嫌いでした。「どうしたらみんな仲良く幸せに暮らせるようになるんだろう…」と考え始めたことが、国際協力について興味を持ち始めたきっかけです。そこで注目したのがＮＧＯでした。「その活動を内側からも見てみたい」と思うようになり、インターネットでＪＶＣのインターン募集を見つけて応募しました。東京事務所では現地に行っていた方のお話が直接聞けるので、とても面白いし勉強になります。この一年間でいろんなことを吸収していきたいと思います。

小熊（おぐま） 悠矢（ゆうや） アフガニスタン事業インターン

現在は大学三年生として、軍縮や国際情勢研究、歴史などを勉強しています。

一年の時に、講師として大学に来られていた熊岡先生の授業をとった事で、ＪＶＣの存在を知りました。二年時のアメリカ留学からの帰国後、将来ＮＧＯを作りたいと考えるようになっていた私は、熊岡先生に相談して、このインターンに応募しました。

将来的には地雷除去などの無差別兵器の廃絶を目指すＮＧＯを作りたいと思っているので、インターンを通してＮＧＯの運営面などいろいろな事を学び、将来のＮＧＯ設立につなげていきたいと思います。

上村（かみむら） 未来（みく） 代表補佐インターン

大学に入学してからＰＡＣＥ（カンボジアの教育を支える会）という団体で活動をしてきました。そして、その団体の前代表がＪＶＣカンボジアチームに参加していたことから、ＪＶＣを知るようになりました。カンボジアが大好きで、既に六回も現地に行ってしまいました。

素敵なスタッフの方々が集まるＪＶＣのインターンという素晴らしい機会を通して、ＮＧＯの役割や現実の社会問題についてより深く学んでいきたいと思っています。

櫻井（さくらい） 愛（あい） 広報インターン

インターンとして通うようになって、あれれ？という間に二ヶ月が経ちました。これから国際協力という分野にどのように携わっていくのかを考えるためにも、理論ではなく、それを実践しているＮＧＯを内部から見たいという気持ちがありました。スタッフの方との話が人生相談になるときもしばしば。皆さんに出会えて良かったな、とすでにしみじみ感じています。そして、東京事務所は予想以上に運営がきちんとしていて、日々社会勉強にもなっています。

一年後にどう成長しているかはわかりませんが、せめて文章がもっと上手に書けるように努めていきたいと思います。

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：**00190-9-27495**
加入者名：**JVC東京事務所**

3月計　**9,666,569円**
4月計　**3,405,032円**

	3月	4月
無指定	1,183,593円	609,142円
タイ	1,000円	50,000円
（津波被害）	0円	0円
カンボジア	12,000円	0円
ラオス	662,000円	405,800円
ベトナム	76,030円	1,000円
南アフリカ	182,000円	1,000円
パレスチナ	179,650円	39,250円
アフガニスタン	1,632,089円	49,183円
コリア	1,000円	0円
イラク	1,624,007円	214,657円
スーダン	41,000円	35,000円
パキスタン地震	4,072,200円	2,000,000円
調査研究	0円	0円

②犬養道子「みどり一本」募金

JVC活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：**00100-8-212497**
加入者名：**犬養道子「みどり一本」**

3月計　**318,400円 / 28件**
4月計　**141,150円 / 25件**

③ JVCマンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

3月計　**1,060,200円 / 918件**
4月計　**1,107,400円 / 948件**

編集後記

ある夜、なにげなくラジオをつけたら「アマンドラ！」のシュプレヒコール。これはまさに、前々号にご登場頂いた佐竹さんが翻訳された小説のラジオドラマだ！と気付き、耳を傾けた。今回ご登場の砂金さんのお店では、写真撮影だけのはずが、あれこれと小一時間もお喋り。『国内ひろば』の編集に携わって、広がる世界がある。誌面からちょっとした「発見」や「広がり」を感じてもらえたら、とてもうれしい。（テ）

Trial & Error（試行錯誤）二百五十三号

一九八二年八月十六日 第三種郵便物認可
二〇〇六年六月二十日発行（通巻二百五十三号・隔月二十日発行）

発行人＝熊岡路矢
編集人＝大野和興・清水俊弘
編集スタッフ＝広瀬哲子
レイアウト＝細野純也

発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇-八六〇五 東京都台東区東上野一-二〇-六丸幸ビル六階
電話［〇三］三八三四-二三八八 FAX［〇三］三八三五-〇五一九
印刷＝ベスト・プリンティング

定価＝五〇〇円（税込）

暮らしを彩る道具

LIFEWORK ITEMS

77

Laos

手編みのゴザ

トゥイナンという草の葉が材料。村の女性たちが
編み上げるもので、これを販売することが貴重な収入源となっている。
（カムアン県ホワイタート村で撮影）

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

◎一般会員　10,000円
◎学生会員　5,000円
◎団体会員　30,000円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当へ。
s-tera@ngo-jvc.net

会員数（6月6日現在）合計 1499人
（正会員 690人　賛助会員 809人）

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。（無料。予約不要です）

第1月曜日　午後7：00－8：30
第2・第4土曜日　午後2：00－3：30
※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。